

私の生きがい

石や小枝、野菜などの自然の素材を使って創作をしている片岡の大谷章さん（75歳）をお訪ねして話を伺いました。

◎創作活動の動機は

ある時、河原を歩いていたら、ペコちゃん人形に似た石があり、その石を持ち帰って、石の持つ不思議な魅力を出せるように工夫しながら、独創的な表現を大事にして作ったのが最初でした。

新聞などで、創作作家が素晴らしい発想をしている記事を見ると、それがヒントになったりします。

平成十一年頃、矢板警察署の交通安全協会に勤務をしていた時に、警察署内に飾ったところ好評で、それが今日まで作り続ける大きなきっかけになりました。

◎作品を作る時の苦労は

一つの作品を仕上げるまでには、細かい部分を細工することに神経を使い、木を乾かすのにも、二カ月から三カ月かかる時もあります。

石や、木の枝だけでなく、友達が持ってきてくれる野菜なども使います。ですが、野菜は日が経つと傷んでしまうので、素早く作業をしなければ

ならないので苦労します。

◎イメージは、どこから生まれるのか

スポーツ新聞を見たりして、イメージを考えて、今までに約二百ほどの作品を作りました。

数ある中で一番のお気に入りには、木の枝で作った綾小路きみまろです。

これは、頭から足のつま先まで、かなり細かい作業になりましたが、背広を作ることによって人物がいきいきとして、見たときに強い印象が感じられ、イメージ通りにできました。



◎工夫から生まれた作品は、下野新聞に掲載されたたり、

平成二十一年にTBSのテレビ番組「アッコにおまかせ」で放送されたりもしました。また、平成二十四年には、浅田真央さんをモデルにした作品を作り、その写真を送ったところ、お礼のハガキが届いたことも。



◎これからの目標は

楽天の田中選手のような、一年間を通して活躍をした、野球選手や有名人などを表情豊かな技法で作りたいと考えています。また、アンパンマンなどのキャラクターもユニークに作ることを考えています。これからもいろいろと模索をしながら、造形の技術を深く極めていければと思っています。

工夫を凝らして作られた大谷さんの作品は、現在、農協などにも展示されている。

交通安全の標語なども添えられ、温かみを感じられ、作品にも華を添えている。

技術は高く評価され、大谷さんならではの芸術作品となっている。(S・M)

究極の市民力 矢板市消防団

冬晴れの乾燥した日が続き、火災発生危険がもっとも大きいこの季節。

消防署と共に矢板市民の生命と財産を守る活動をしている矢板市消防団の藤田 實団長（64歳）にお話を伺った。

◆矢板市消防団の概要について

市の条例で定員は四〇八人と定められていますが、現在は三九八人（うち女性団員八人）の団員が第一分団から第五分団の地域単位に分かれ活動しています。入団資格は十八歳以上なら男女は問いませ



んと一言で言うならば、初期消火活動は消防署で、類焼防止や残り火の処理を消防団が担当します。

にに応じて対応します。また、あわせて署から団員の携帯電話に一斉メールが配信されます。

◆苦勞されていること
人員確保が一番大変です。以前は市内の商店主が中心でしたが、商店が減少したり、店主も高齢化していることも要因の一つです。また、会社員は昼間に出勤できる人が少ないので、出勤が困難になります。

◆嬉しかったこと
やはり三年前の大震災が大変でもありました。団員が給水車で市民に飲用水を配り、がれきの処理を手伝い市民から感謝してもらったことです。

具体的には消防署で火災発生通報を受けると、ポンプ車と指令車が出動し、現場で状況を判断し、本部に連絡しサイレンを吹鳴します。

このサイレンの鳴らし方で地域がわかり、指令車と署の無線交信も分断で傍受でき状況

最後に藤田団長は「消防団員は『自らの地域は自らで守る!』という使命感を持って日頃活動しています。」と力強く結んでくれました。

水道や電気が復旧するまで一カ月以上かかりましたが、その間多くの団員が出動してくれました。

(T・M)